

居住環境調整の歴史（その2）「女性と居住環境改善」

【今日の課題例】

女性もしくは男性という視点からは、居住環境の改善や調整に対して、どのような役割を果たすことができると考えられるだろうか？

→例えば、女性は、どのような点で居住環境の改善に貢献できるのか？一方、男性は、どのような点で居住環境の改善に貢献できるのか？

それとも、女性や男性などの性差は、建築や居住環境の世界では、意味がないものであろうか？存在しないものであろうか？もしくは、否応なく存在しているのであろうか？

さらには、性差ということ（もの、言葉）自体が、意味がないものであろうか？存在しないものであろうか？もしくは、否応なく存在しているのであろうか？

ジェンダー・マイノリティ（性的少数者）もしくはLGBT（LBGTQ）などからみた建築や居住環境の世界はどんなものであろうか？「女性ならではの視点」や「男性ならではの視点」は本当にあるのか？ないのか？また、「女性らしい建築」や「男性らしい建築」は本当にあるのか？ないのか？

【まずは、自分なりに考えてメモしてみよう】

【スライドと音声ファイルを視聴し終わった後に、気がついたことをメモしておこう】

→これらのメモをもとに、ミニレポートを書いてみよう

1. 浜口ミホ（参考文献 [1] ～ [7]）を参照）

かつては、女性が居住環境の改善に関わるのが難しい時代もあったのではないかと

その当時は、どんな状況だったのだろうか？どんなことを考えておられたのだろうか？

※資料5（配付資料50頁）も参照

・女性初の一級建築士（本名：浜口美穂（旧姓：濱田））

- | | |
|-------------|--|
| 1915（大正4）年 | 大連生まれ |
| 1933（昭和8）年 | 東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）家事科に入学
卒業後、家庭科の教師となる |
| 1938（昭和13）年 | 東京帝国大学工学部建築学科の聴講生（1年間）
その後、前川國男建築事務所の所員となる（～1948（昭和23）年） |
| 1941（昭和16）年 | 展覧会「新しき都市・東京都市計画の一試案」で、DKの原型を発表
建築家の浜口隆一と結婚
開戦後、北海道石狩郡当別村に疎開 |
| 1948（昭和23）年 | 「浜口ミホ住宅相談所（後にハウジング設計事務所）」開設 |
| 1949（昭和24）年 | 『日本住宅の封建性』出版（→配付資料46～48ページの資料1～資料3
を参照）
→「日本住宅の根底に潜む男女差別，家長制度，不合理な因習等をする
どく批判」（参考文献 [1] より） |
| 1954（昭和29）年 | 一級建築士取得 |
| 1955（昭和30）年 | 住宅公団のダイニング・キッチン開発プロジェクト参加（→ビデオ参照）
昭和40年代からは、建て売り住宅の基本設計の仕事に着手
晩年は、老人住宅に着目 |
| 1988（昭和63）年 | 73歳で逝去 |

「食事と炊事の空間を一つに融合させる。これによって、台所が低い生活空間であるという矛盾は克服することができる。食事・炊事の両空間とも立式でなければならない」

（『建築界 11・12月号』（1946年）より）

2. 駒田栄（参考文献 [8] を参照）

- ・住居衛生分野における女性研究者としての草分け
- ・住生活改善に関する研究と啓蒙普及活動を行う（ただし、社会学の立場から）

→居住環境や建築への関わり方にもいろいろあるのではないか？

→日々の生活に密着している分野だからこそ、いろいろな立場があり、いろいろな関わり方があるのではないか？

→極端な話、人の数ほど、関わり方は様々かもしれない。

1901（明治34）年	三重県安芸郡芸濃町椋本に駒田栄四郎、りつの長女として生まれる 椋本小学校を卒業後、三重県立津高等女学校に入学
1920（大正9）年	本科修了後、三重県立津高等女学校補修科を卒業 鐘淵紡績株式会社に就職（～1923（大正12）年）
1924（大正13）年	大阪阿倍野の古屋女子英語塾で英語を学ぶ（～1927（昭和2）年）
1928（昭和3）年	カリフォルニア州オークランドのミルズカレッジ（Mills College, 参考URL [2] を参照）に留学
1932（昭和7）年	ミルズカレッジを卒業、帰国
1933（昭和8）年	聖路加国際病院（参考URL [3] を参照）医療社会事業部に就職、医療ソーシャルワーカーとして働く（～1938（昭和13）年）
1939（昭和14）年	国立公衆衛生院（参考URL [4] を参照）に就職（以後、退職まで33年間勤める）
1942（昭和17）年	国立公衆衛生院建築衛生部所属 社会学の立場から住居衛生等の研究を行うとともに、普及・啓蒙活動を行う 戦時中：工場労務者住宅 敗戦直後から1940年代後半：住宅調査、住宅衛生、劣悪住宅と疾病の関係、生活時間調査 1950年代前半：不良住宅地区の実態調査と方法論 1950年代後半：世帯構造、厨房関係 1960年代：「都市生活者の居住条件と健康・精神衛生に関する研究」
1948（昭和23）年	高輪アパート（参考URL [5] を参照）に（実験）入居
1951（昭和26）年	二級建築士取得
1954（昭和29）年	カリフォルニア大学バークレー校大学院に公務出張（～1955（昭和30）

年)

1963（昭和38）年 ミルズカレッジから法学名誉博士号授与

1972（昭和47）年 国立公衆衛生院退職

1995（平成7年）5月 逝去

3. その他の建築にかかわる女性達

→先人達は、どのようにお仕事をされてきたのだろうか？どのようにそのキャリアを歩んでこられてきたのだろうか？気になった方の参考文献を読んでみよう

（1）土浦信子（参考文献 [9], [10] などを参照）

- ・日本初の女性建築家，フランク・ロイド・ライトの弟子（1923～25年までアメリカに滞在）
- ・1900（明治33）年～1998（平成10）年
- ・吉野作造の娘
- ・夫の土浦亀城も建築家

（2）小川信子（参考文献 [11] などを参照）

- ・1929（昭和4年）生まれ
- ・元日本女子大学教授，現在北海道浅井学園大学教授
- ・保育所をはじめとする地域施設研究を中心に生活環境に関する研究を行ってきた研究者
- ・保育所や幼稚園を主として設計してきた建築家

（3）高橋公子（参考文献 [12] ～ [14] などを参照）

- ・1932（昭和7年）～1997（平成9）年
- ・元日本女子大学教授
- ・住宅を設計してきた建築家

（4）長谷川逸子（参考文献 [15] ～ [18] などを参照）

- ・1941（昭和16年）生まれ
- ・長谷川逸子・建築計画工房
- ・現在関東学院大学客員教授

（5）妹島和世（参考文献 [19] ～ [22] などを参照）

- ・1956（昭和31年）茨城県生まれ
- ・1987年妹島和世建築設計事務所設立
- ・1995年西沢立衛とSANAA設立
- ・再春館製薬女子寮（1990～1991年）など

（6）その他

→前ページも含めて情報としては古いものも多い。更新が難しくなっているのに注意。

- ・その他の女性の建築家については、参考文献 [23] ～ [37] などを参照
- ・戦前期の女性達とすまいづくりの関係については、参考文献 [38] ～ [42] などを参照
- ・女性と仕事に関する参考文献 [43] ～ [52] なども参照
- ・熊本合同卒業設計展（DA5展，開催終了）のクリティーク

第4回（2010）：永山祐子さん，第6回（2012）：松岡恭子さん（第7回（2013）も），宮城雅子さん

- ・これまでに講演をお願いした建築にかかわる女性

末廣宣子さん（2007年，建築家），松岡恭子さん（2008年，建築家），坂口舞さん（2009年，建築家），吉橋久美子さん（2009年，くらすば主宰），金子由里子さん（2010年，建築家），萩輪麻由さん（2015年，公務員），箕浦永子先生（2017年，研究者），源島千弘さん（2019年，建設会社勤務）

→吉橋さん（くらすば）のフェイスブック/ホームページ

<https://www.facebook.com/clasba/>

旧ブログ『ぼくらはみんな暮らしてる ～くらすば～』<http://clasba.exblog.jp>

旧旧ブログ『ぼくらはみんな暮らしてる』<http://basuraku.blog68.fc2.com>

『くらすば』（旧サイト）<http://gclasba.wixsite.com/clasba>

『Candy House』（オカシア）<https://candyhousepj.com>

『お菓子こうむてん』のフェイスブック

https://www.facebook.com/OkashiKoumuten/?ref=pages_you_manage

→一歩進めて，自分自身の進路選択，キャリア形成についても考えてみよう

→職業の選択にあたっては，自分が知っているものや経験したことのある範囲の中から選択せざるを得ない（他のことも同じであろうけど）

→「働く」イメージはあるのだろうか？

4. ビデオ

⇒以下は、2020年度の記述。今年度も問題はそのまま。特には解決できず。

→遠隔式の授業の2回目で既に問題にあたってしまった。

→例年であれば、下記のビデオを、教室で視聴するのだが、遠隔式の授業では難しい。また、インターネット上にも、著作権の問題から公開されていないようである（YouTubeでは、削除依頼が出されているらしい）。厳密に言えば、教室で視聴することも、著作権法上問題があったのかもしれない。

→一応、例年のデータを下記に挙げておく。

NHK プロジェクト X 挑戦者たち

『妻に贈ったダイニングキッチン 勝負は一坪・住宅革命の秘密』（約45分、平成12（2000）年5月2日放送）

→キッチン・台所については、参考文献 [53] ～ [84] など、参考URL [7] ～ [12]などを参照

→こういうところにも卒業論文のテーマが転がっているかも（来年度の話だが）

→49ページの資料4も参照。

5. 参考文献（[]内は、熊本県立大学図書館所蔵情報。☆は、特に関係が深いと考えられる文献。）

だいぶ情報が古くなってきたが更新がままならず。申し訳ないです。（2022.10.10）

配付資料に関する参考文献

- [1]『はなしシリーズ ダイニング・キッチンはこうして誕生した 女性建築家第一号浜口ミホが目指したもの』☆（北川圭子，技報堂出版，2002年1月，¥2,400+税，ISBN：4-7655-4430-3）〔和書（2F），527.3||Ki 63, 0000262952〕
- [2]『住宅建築家・浜口ミホについての考察-経歴及び公団ダイニング・キッチンとの関わり-』（北川圭子，日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集，F-2，pp.97～98，2000年9月）
- [3]『わが国におけるダイニング・キッチン成立過程に関する研究-戦後復興期における建築家の主張および提案の分析-』（北川圭子・大垣直明，日本建築学会計画系論文集，第576号，pp.171～177，2004年2月）〔所在：図書館〕
- [4]『公団におけるダイニング・キッチン成立過程に関する研究-「55-4N-2DK」の空間モデルについての考察-』（北川圭子，日本建築学会計画系論文集，第600号，pp.197～201，2006年2月）〔所在：図書館〕
- [5]『『日本住宅の封建性』の方法論について』（青木正夫，日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集，E-2，pp.1～2，2000年9月）
- [6]『住まい学大系 065 建築人物群像 追悼編／資料編』（土崎紀子・沢良子編，住まいの図書館出版局，1995年4月，¥3,786+税，ISBN：4-7952-0865-4）〔和書（2F），520.8||SU 56||65, 0000177852〕

- [7] 『日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者』（松川淳子・中島明子・杉野展子・宮本伸子，住宅総合研究財団研究年報，No. 30，pp. 251～262，2004年3月）〔所在：図書館〕
→住総研のHPからも検索可能（http://www.jusoken.or.jp/paper_archive.html）
- [8] 『住居衛生研究の女性パイオニア，駒田栄に関する研究』（中島明子・小林陽太郎・菊地邦子・嶋田和子・白鳥真理子・早福千鶴・松尾邦子・山口治子，住宅総合研究財団研究年報，No. 27，pp. 195～206，2001年3月）〔所在：図書館〕
→住総研のHPからも検索可能（http://www.jusoken.or.jp/paper_archive.html）

女性の建築家や女性と建築業界に関する参考文献

- [9] 『ビッグ・リトル・ノブ ライトの弟子・女性建築家 土浦信子』☆（小川信子・田中厚子，ドメス出版，2001年3月，¥2,200+税，ISBN：4-8107-0541-2）〔和書（2F），289.1||0 24，0000263296〕
- [10] 『土浦亀城・信子夫妻のアメリカ滞在-異文化交流の視点から』（田中厚子，日本建築学会大会（東北）学術講演梗概集，F-2，pp. 17～18，2000年9月）
- [11] 『生活環境の探求 小川信子の世界』☆（日本女子大学住居小川研究室の会編，ドメス出版，1998年5月，¥2,000+税，ISBN：4-8107-0480-7）〔和書（2F），365||0 24，0000248351〕
- [12] 『時間の中の住まい 高橋公子と五つの住まいの現在』☆（日本女子大学高橋研究室の会編，彰国社，2003年7月，¥2,400+税，ISBN：4-395-00693-0）〔和書（2F），527.1||N 77，0000317647〕
- [13] 『住まい学大系 017 女のハイテック 生活行為と空間のシステム』（高橋公子，住まいの図書館出版局，1988年8月，¥1,709+税，ISBN：4-7952-0887-5）〔和書（2F），520.8||SU 56||17，0000177814〕，
〔書庫（4F），365.308||SU1||17，0000112684〕
- [14] 『住まいの近景・遠景』（高橋公子，彰国社，1994年4月，¥2,000+税，ISBN：4-395-00414-8）〔和書（2F），527.04||Ta 33，0000276297〕
- [15] 『こんな生き方がしたい 建築家 長谷川逸子』☆（実川元子，理論社，2001年12月，¥1,500+税，ISBN：4-652-04942-0）〔和書（2F），289.1||J 55，0000263453〕
- [16] 『住まい学大系 095 生活の装置-私の住宅設計』（長谷川逸子，住まいの図書館出版局，1999年2月，¥2,600+税，ISBN：4-7952-2139-1）〔和書（2F），527.1||H 36，0000231304〕
- [17] 『職業は建築家 君たちが知っておくべきこと』（ローランド・ハーゲンバーク，柏書房，2004年11月，¥2,000+税，ISBN：4-7601-2623-6）〔和書（2F），520.28||H 12，0000300754〕
- [18] 『この先の建築』（ギャラリー・間・小巻哲編，TOTO出版，2003年7月，3,000円+税，ISBN：4-88706-225-7）〔和書（2F），520.4||G 99，0000274944〕
- [19] 『妹島和世読本-1998』（二川幸夫編，エーディーエー・エディタ・トーキョー，1998年2月初版，2004年12月第4版，¥2,800+税，ISBN：4-87140-650-4）〔和書（2F），520.8||F 97，0000249570，0000253525〕
- [20] 『妹島和世+西沢立衛/SANAA-WORKS 1995-2003』（妹島和世・西沢立衛，TOTO出版，2003年6月，¥3,000+税，ISBN：4-88706-224-9）〔和書（2F），520.8||Se 99，0000277294〕
- [21] 『妹島和世+西沢立衛読本-2005』（二川幸夫編，エーディーエー・エディタ・トーキョー，2005年1月，¥2,800+税，ISBN：4-87140-662-8）〔和書（2F），520.8||F 97||2005，0000292561〕
→2013版もあり（2013年4月，¥2,800+税，ISBN：978-4-87140-681-9）〔和書（2F），520.8||F 97||2013，0000356594〕
- [22] 『GA ARCHITECT 18 KAZUYO SEJIMA RYUE NISHIZAWA 1987-2006』（二川幸夫編，エーディーエー・エディタ・トーキョー，2005年11月，¥5,667+税，ISBN：4-87140-426-9）〔和書（2F），520.87||G

11||18, 0000301585]

- [23] 『「建築学」の教科書』（安藤忠雄ほか，彰国社，2003年6月，¥2,286+税，ISBN：4-395-00542-X）
〔和書（2F），520||A 47, 0000272874〕
- [24] 『僕たちは何を設計するのか 建築家14人の設計現場を通して』（千葉学・藤本壮介・安田光男・山代悟編，彰国社，2004年9月，¥2,400+税，ISBN：4-395-11115-7）〔和書（2F），525.1||C 42, 0000308357〕
- [25] 『旅。建築の歩き方』（槻橋修編，彰国社，2006年12月，¥1,950+税，ISBN：4-395-24004-6）〔和書（2F），520.4||Ts 62, 0000304922〕
- [26] 『現在建築家コンセプトシリーズ3 乾久美子 そっと建築をおいてみると』（乾久美子・藤村龍至・西澤立衛，INAX出版，2008年9月，¥1,800+税，ISBN：978-4-87275-151-2）〔和書（2F），523.1||I 59, 0000324880〕
- [27] 『僕らはこうして建築家になった』（国弘ジョージ，TOTO出版，2005年3月，¥1,500+税，ISBN：4-88706-251-6）〔和書（2F），520.28||Ku 43, 0000292543〕
- [28] 『太陽レクチャー・ブック 006 建築家の仕事』（アトリエ・ワン 乾久美子 クライン ダイサム アーキテクト 手塚貴晴+手塚由比 藤本壮介 堀部安嗣，平凡社，2006年6月，ISBN：4-582-63069-3）〔和書（2F），520.28||A 94, 0000301971〕
- [29] 『別冊みかんぐみ』（みかんぐみ，エクスマレッジ，2002年7月，¥1,500+税，ISBN：4-7678-0242-3）〔和書（2F），520.8||Mi 22, 0000268480〕〔和書（2F），520.18||Mi 21||1, 0000364664〕
- [30] 『別冊みかんぐみ2』（みかんぐみ，エクスマレッジ，2007年1月，¥1,800+税，ISBN：4-7678-0611-2）〔和書（2F），520.18||Mi 21||2, 0000364665〕
- [31] 『もっと知りたい建築家 淵上正幸のアーキテクト訪問記』（淵上正幸，TOTO出版，2002年12月，¥1,900+税，ISBN：4-88706-219-2）〔和書（2F），520.28||F 51, 0000269950〕
- [32] 『きもちのいい家』（手塚貴晴+手塚由比，清流出版，2005年12月，¥1,500+税，ISBN：4-86029-131-X）〔和書（2F），527||Te 95, 0000300755〕
- [33] 『手塚貴晴+手塚由比 建築カタログ』（手塚貴晴+手塚由比，TOTO出版，2006年3月，¥2,400+税，ISBN：4-88706-267-2）〔和書（2F），520.8||Te 95||1, 0000324881〕
- [34] 『手塚貴晴+手塚由比 建築カタログ2』（手塚貴晴+手塚由比，TOTO出版，2009年3月，¥2,200+税，ISBN：978-4-887706-299-3）〔和書（2F），520.8||Te 95||2, 0000324882〕
- [35] 『デザインガイドブック 建築家の仕事 1970-2007傑作住宅60選』（Real design編集部編，柘出版社，2007年10月，¥1,500+税，ISBN：978-4-7779-0870-7）〔和書（2F），527.1||Ke 41, 0000316697〕
- [36] 『図解 アトリエ・ワン』（アトリエ・ワン（塚本由晴+貝島桃代），TOTO出版（東陶機器株式会社 文化推進部），2007年3月，¥2,600+税，ISBN：4-88706-278-8）〔和書（2F），527.1||A 94, 0000308709〕
→2もあり（2014年2月，¥3,000+税，ISBN：978-4-88706-340-2）〔和書（2F），527.1||A 94||2, 0000361066〕
- [37] 『インテリアデザイン教育の現場 1970-2000』（内井乃生，丸善プラネット，2002年6月，¥2,800+税，ISBN：4-901689-05-3）〔和書（2F），529.07||U 16, 0000270177〕

戦前期の女性達と住まいづくりの関係に関する参考文献

- [38] 『女性雑誌に住まいづくりを学ぶ 大正デモクラシー期を中心に』（久保加津代，ドメス出版，2002年3月，¥1,600+税，ISBN：4-8107-0565-X）〔和書（2F），527.021||Ku 11, 0000263275〕
- [39] 『家政学系住居教育の生成期の研究-近代教育発生当初の文部省の定めた家政学教育の変遷-』（石井菜生，日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集，F-2，pp.605～606，2003年9月）

- [40] 『近代日本女子高等教育に取り込まれたアメリカの住教育理念』（石井菜生，日本建築学会計画系論文集，第610号，pp.213～220，2006年12月）〔所在：図書館〕
- [41] 『昭和初期の住まいと暮らし方研究-小林孝子の考現学的手法による事例調査を資料として-』（長山洋子・前島諒子・林知子，2003年度日本建築学会関東支部研究報告集，pp.441～444，2004年3月）
- [42] 『住生活と住教育 これからの住まいと暮らし方を求めて』（奈良女子大学住生活学研究室編，彰国社，1993年5月，¥2,330+税，ISBN：4-395-00405-9）〔書庫（4F），365.3||N 51，0000157432〕

女性と職業に関する参考文献（少し古め）

- [43] 『建築する人たち アーキテクト・アーティストの素顔』（米井寛・石井太志・吉武宗平編，圓津喜屋，2005年7月，¥2,000+税，ISBN：4-99000779-4-6）〔和書（2F），520.28||Y 82，0000300756〕
- [44] 『アルバムの家』（女性建築技術者の会編，三省堂，2006年11月，¥1,800+税，ISBN：4-385-3627-4）〔和書（2F），527.04||J 76，0000308278〕
- [45] 『安全靴とハイヒール 建築現場で働く女性たち』（平山友子，パンドラ発行，現代書館発売，1997年5月，¥1,800+税，ISBN：4-7684-7776-3）〔和書（2F），520.9||H 69，0000292562〕
- [46] 『光に魅せられた私の仕事 ノートル・ダムライトアッププロジェクト』（石井リーサ明理，講談社，2004年11月，¥1,500+税，ISBN：4-212666-4）〔和書（2F），545.6||I 75，0000300757〕
- [47] 『都市と光 照らされたパリ』（石井リーサ明理，水曜社，2005年1月，¥2,500+税，ISBN：4-88065-137-0）〔和書（2F），545.6||I 75，0000300758〕
- [48] 『集英社文庫 0157B 若き女職人たち』（阿部純子・伊藤なたね写真，集英社，2002年9月，¥700+税，ISBN：4-08-720157-0）〔文庫本（3F），080||Sh 99||157 v 0000285872〕
- [49] 『妹たちへ 夢をかなえるために，今できること』（日経WOMAN編，日本経済新聞社，2005年8月，¥1,500+税，ISBN：4-532-16530-X）〔和書（2F），281.04||N 73，0000301660〕
- [50] 『日経WOMAN リアル白書 働く女性の24時間 女と仕事のステキな関係』（野村浩子，日本経済新聞社，2005年10月，¥648+税，ISBN：4-532-19312-5）〔文庫本（3F），080||N 73||312，0000301586〕
- [51] 『ウーマン・オブ・ザ・イヤー しびれるほど仕事を楽しむ女たち』（日経WOMAN編，日本経済新聞社，2005年11月，¥1,400+税，ISBN：4-532-31249-3）〔和書（2F），366.38||N 73，0000308510〕
- [52] 『女子大生のための仕事選びとビジネス・マナー』（合谷美江，中央経済社，2004年10月，¥2,000+税，ISBN：4-502-59080-0）〔和書（2F），366.29||G 71，0000294268〕

キッチン・台所や住宅の水回りの設備などに関する参考文献

- [53] 『プロジェクトX 挑戦者たち 1 執念の逆転劇』☆（NHK「プロジェクトX」制作班編，日本放送出版協会，2000年6月，¥1,700+税，ISBN：4-14-080529-3）〔和書（2F），210.76||P 94||1，0000240917〕
→文庫版もあり（NHKライブラリー 169，2003年12月，¥750+税 ISBN：4-14-084169-9）。
- [54] 『台所空間学 その原型と未来』☆（山口昌伴著・三沢博昭写真，建築知識，1987年1月）〔和書（2F），527.3||YA1，0000118760〕
- [55] 『台所空間学 摘録版』（山口昌伴，建築資料研究社，2000年5月，¥2,400+税，ISBN：4-87460-564-8）〔和書（2F），527.3||Y 24，0000249640，0000253059〕，〔書庫（4F），527.3||Y 24，0000325547〕
- [56] 『生活学第二十三冊 台所の一〇〇年』（日本生活学会編著，ドメス出版，1999年11月，¥4,000+税，ISBN：4-8107-0508-0）〔和書（2F），365||Se 17||23，0000247806〕
- [57] 『角川 one テーマ 21 C-11 世界一周「台所」の旅-人類の繁栄の源はキッチンにあり-』（山口昌伴，

- 角川書店，2001年4月，¥571+税，ISBN：4-04-704028-2）〔文庫本（3F），080||Ka 14||C-11，0000254170〕
- [58]『台所空間学事典 女性たちが手にしてきた台所とそのゆくえ』☆（北浦かほる・辻野増枝編著，彰国社，2002年4月，¥3,400+税，ISBN：4-395-10028-7）〔和書（2F），383.9||Ki 73，0000275647〕
- [59]『建築の絵本 すまいの火と水 台所・浴室・便所の歴史』（光藤俊夫・中山繁信，彰国社，1984年3月，¥2,505+税，ISBN：4-395-27023-9）〔和書（2F），383.9||MI 63，0000177789〕
- [60]『物語ものの建築史 台所のはなし』（山田幸一監修，高橋昭子・馬場昌子著，鹿島出版会，1986年5月，¥1,300+税，ISBN：4-306-09294-1）〔和書（2F），508||Mo 1||2，0000253072〕，〔書庫（4F），508||M01||2，0000063448〕
- [61]『台所から見た世界の住まい』（宮崎玲子，彰国社，1996年2月，¥2,550+税，ISBN：4-395-00454-7）〔和書（2F），597||Mi 88，0000250138〕
- [62]『百の知恵双書011 台所の一万年 食べる営みの歴史と未来』（山口昌伴，農山漁村文化協会，2006年7月，¥2,667+税，ISBN：4-540-04079-0）〔和書（2F），383.9||Y 24，0000308136〕
- [63]『にっぽん台所文化史〈増補〉』（小菅桂子，雄山閣，1998年4月，¥3,000+税，ISBN：4-639-01055-9）〔和書（2F），383.9||Ko 89，0000310593〕
- [64]『昭和 台所なつかし図鑑』（小泉和子，平凡社，1998年1月，¥1,524+税，ISBN：4-582-63334-X）〔和書（2F），383.9||Ko 38，0000283417〕
- [65]『生活と技術の日本近代史 台所用具の近代史 生産から消費生活をみる』（古島敏雄，有斐閣，1996年8月，¥2,500+税，ISBN：4-641-07586-7）〔和書（2F），383.9||F 94，0000283782，0000177050〕〔書庫（4F），383.9||F 94，0000185304〕
- [66]『リクルートムック 住まいの設備を選ぼう 2005年 Summer & Autumn』（Goodリフォーム編，リクルート，2005年8月，¥552+税，ISBN：4-89807-482-0）〔和書（2F），528，9000008856〕
→最新版は『2019年 春』版か？（2019年01月発売，¥590，その後は休刊？）
- [67]『40年のあゆみ サステナブル社会に貢献する工業会活動 1965-2005』（記念史編集委員会編，キッチン・バス工業会，2005年5月，無料，ISBN：なし）〔和書（2F），528||Ki 11，0000363951〕
→50周年記念誌は，下記のホームページからダウンロード可能
<http://www.kitchen-bath.jp/statistics/50anniversary.html>
- [68] 室内最終特別号（725号）『特集 キッチンを囲んで』（工作社，2006年1月，¥1,048+税）〔所在：農山村〕
- [69]『住宅設備の歴史』（空気調和・衛生工学会，空気調和・衛生工学会，2007年10月，2,476円+税，ISBN：なし）〔和書（2F），528.02||Ku 28，0000312489，0000312490〕
- [70]『ALIA NEWS 100号記念特集号『住宅部品がもたらしたもの』（リビングアメニティ協会，2007年7月，無料）〔和書（2F），528||R 33，0000323469，0000323470〕
- [71]『再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし』（青木俊也，河出書房新社，2001年5月，¥1,500+税，ISBN：4-309-72709-3）〔和書（2F），383.9||A 53，0000283125〕
- [72]『間取り百年 生活の知恵に学ぶ』（吉田桂二，彰国社，2004年1月，¥1,800+税，ISBN：4-395-00696-5）〔和書（2F），527.021||Y 86，0000283154〕
- [73]『光文社新書189 「間取り」で楽しむ住宅読本』（内田青蔵，光文社，2005年1月，¥740+税，ISBN：4-334-03289-3）〔文庫本（3F），080||Ko 14||189，0000288517〕
- [74] 隔月刊インテリアマガジン confort 2001年5月増刊号『図説 日本の「間取り」』（建築資料研究社，2001年5月，¥2,095+税）〔和書（2F），527.1||Su 66，0000283196〕

- [75] 隔月刊インテリアマガジン confort 2002年5月増刊号『にっぽん家事録』（建築資料研究社，2002年5月，¥2,095+税）〔和書（2F），590||N 77, 0000283389〕
- [76] 『住まいの文化 豊かな暮らしのためのテキストブック』（住文化研究会，学芸出版社，1997年3月，¥2,200+税，ISBN：4-7615-2173-2）〔和書（2F），597||J 98, 0000283779〕，〔書庫（4F），597||J 98, 0000184103〕
- [77] 『日本住居史』（小沢朝江・水沼淑子，吉川弘文館，2006年3月，¥3,800+税，ISBN：4-642-07947）〔和書（2F），521.86||O 97, 0000301625〕
- [78] 『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』（上野千鶴子，平凡社，2002年11月，¥2,200+税，ISBN：4-582-70508-1）〔和書（2F），367.3||U 45, 0000301668〕
- [79] 『「51C」 家族を容れるハコの戦後と現在』☆（鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕・布野修司・五十嵐太郎・山本喜美恵，平凡社，2004年10月，¥1,800+税，ISBN：4-582-54427-4）〔和書（2F），527.021||Su 96, 0000286348〕
- [80] 『住まい学大系101 51C白書 私の建築計画学戦後史』（鈴木成文，住まいの図書館出版局，2006年11月，¥3,000+税，ISBN：4-89977-172-X）〔和書（2F），520.8||Su 56||101, 0000308272〕
- [81] 『ナチスのキッチン 「食べること」の環境史』（藤原辰史，水声社，2012年5月，¥4,000+税，ISBN：978-4-89176-900-0）〔和書（2F），383.9||F 56, 0000351393〕
- [82] 『キッチンの歴史 料理道具が変えた人類の食文化』（ビー・ウィルソン著，真田由美子訳，河出書房新社，2014年1月，¥2,800+税，ISBN：978-4-309-02260-4）〔和書（2F），596.9||W 75, 0000361127〕
- [83] 『台所に敗戦はなかった 戦前・戦後をつなぐ日本食』（魚柄仁之助，青弓社，2015年8月，¥1,800+税，ISBN：978-4-7872-2061-5）〔和書（2F），596.21||U 79, 0000367125〕
- [84] 『お母さんは忙しくなるばかり 家事労働とテクノロジーの社会史』（ルース・シュウォーツ・コーワン，高橋雄造訳，法政大学出版局，2010年10月，¥3,800+税，ISBN：978-4-588-36414-3）〔和書（2F），590.253||C 89, 0000338155〕

追加

- [85] 『ようこそ建築学科へ 建築的・学生生活のススメ』（五十嵐太郎監修，松田達・南泰裕・倉方俊輔・北川啓介，学芸出版社，2014年4月，¥1,800+税，ISBN：978-4-7615-1336-8）〔和書（2F），520.7||I 23, 0000362186〕
- [86] 『建築学生の[就活]完全マニュアル 2022-2023-建設業界・企業が一目で解る！』（星裕之・就活マニュアル委員会，エクスマレッジ，2020年11月，¥1,200+税，ISBN：978-4-7678-2942-5）〔就活・レポート（1F），520.9, 9000014101〕

6. 参考 URL

だいぶん情報が古くなってきたが更新がままならず。申し訳ないです。（2022.10.10）

- [1] 講義資料のダウンロード
https://www.pu-kumamoto.ac.jp/users_site/m-tsuji/kougi.html/tyosei.html/tyosei.html
- [2] ミルズカレッジのホームページ
<https://www.mills.edu/index.php>
- [3] 聖路加国際病院のホームページ
<https://hospital.luke.ac.jp>
- [4] 国立保健医療科学院（旧国立公衆衛生院などが合併）のホームページ
<https://www.niph.go.jp>
- [5] 「リサーチ・ナビ」 > 「本の万華鏡」 > 「過去の常設展一覧」 > 「第119回 日本の集合住宅-アパート、マンションに見る20世紀-」（pdfファイルでの提供）（国立国会図書館のホームページより）
https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_999368_po_119.pdf?contentNo=1
- [6] ぽむ企画のホームページ
<https://pomu.tv>
→ <https://twitter.com/pomukatsura>
→ <https://note.com/pomukatsura/>
→ <https://twitter.com/pomumie>（2018年09月に亡くなられたが、アカウントは残っている）
- [7] 株式会社LIXILグループのホームページ
<https://www.lixil.com/jp/>
※旧 サンウェーブ工業株式会社（2015年4月合併）、旧 株式会社INAX（2011年4月合併）、旧 トステム株式会社（2011年4月合併）などは、LIXILグループに合併された。かつての情報は、Wikipediaなどで参照するしかなくなってきている。一応、ホームページ > 「LIXILについて」 > 「LIXILの歩み」に少しは書かれている。
- [8] 東陶機器株式会社（TOTO LTD.）のホームページ
<https://jp.toto.com>
- [9] タカラスタンダード株式会社のホームページ
<https://www.takara-standard.co.jp>
- [10] 一般財団法人ベターリビングのホームページ
<https://www.cbl.or.jp/index.html>
- [11] キッチン・バス工業会のホームページ
<https://www.kitchen-bath.jp>
- [12] 社団法人リビングアメニティ協会のホームページ
<https://www.alianet.org>
- [13] 「日本の若手建築家／Japanese architects of the next generation」（公益財団法人 石川文化振興財団のホームページより）
<https://sites.google.com/a/ishikawafoundation.org/architect/> 日本の若手建築家 japanese-architects-of-the-next-generation
- [14] 「ワールドアーキテクト」日本版のホームページ
<https://www.japan-architects.com/ja>
- [15] 「建築学生のための情報サイト「LUCHTA」（ルフタ）」のホームページ（日建学院系列）
<https://luchta.jp>
- [16] 「総合資格学院」 > 「学生の方」 > 「設計展・建築系イベント」のホームページ
<https://www.shikaku.co.jp/future/index.html>

+++++

資料1：

浜口ミホ『日本住宅の封建性』1948（昭和23）年（参考文献[74]の「再録」（p.96）より）。

玄関という名前をやめよう

玄関-より正確に言えば「玄関」とよばれるところの出入口-からその封建的性格を拭いさるために、私はここに「玄関」というその名前を廃止することを提唱したい。新しい名前として、どんなものが適当であるかは一応議論のあるところであろうが、その機能的要素をもっとも率直に言いあらわしている「出入口」という名前などはどうかと思っている。このように名前を変えるということに対して、或いはそんなことをしても無意味だと言われる方があるかも知れないが、しかしそれは必ずしも無意味ではないのである。というのは上述のことから知られるように、人々が「玄関」という名前を口にするとき、そこには人間の出入という機能的な意味のほか、家の社会的身分を示すという格式的な意味を含んだ、いわば社会的通念としての玄関が考えられている。人々は「玄関」という名前によって無意識的に格式的性格を連想しているのである。言ってみれば「玄関」という名前は格式的性格の心理的担い手なのである。

このことは次のような場合-しかも現在のわれわれにとって、きわめて現実的な-を考えると一層はつきりする。いま戦災跡に建つバラック住宅の出入口のように、格式的要素のほとんど含まれていないものについてでも、人々はそれを「玄関」とよんでいるが、この場合人々の脳裏に描かれている「かくあるべき玄関」と現実のバラックに「かくある玄関」（出入口）との間には著しいギャップがあるわけであり、したがって人々はやがて経済的余裕ができ次第、必ずや「かくあるべき玄関」-格式的要素を充分にもったいわゆる「玄関」-につくりかえようとするであろう。つまり「玄関」という名前そのものが玄関の格式的性格を温存・発展させるための重大な梃子となるのである。もしこの場合われわれのすべて-社会の人間すべて-がそれを「玄関」とよばずに「出入口」とよぶとするならば、事態は異なってくるであろう。「出入口」という名前は機能的性格を露出させるとともに、他方格式的性格の温存を許さない。したがって、やがて経済的余裕ができて、人々がよりよいものをつくろうとするようになったときも、人々が「出入口」といったような、純粋に機能的な観念によって考えを進めてゆくとすれば、人々はあくまで機能的な意味において、よりよいものを求めざるをえないであろう。とすれば、そこに格式的要素が侵入して、またもとの格式的・封建的な玄関がまえが復旧されてしまうということはあるなくなる。

以上見るように、「玄関」とよぶか、「出入口」とよぶかということは一見ごくつまらない名目上のことのようにであるが、単に名前だけの問題ではなく-われわれの住宅の出入口のつくりそのものを格式的・封建的なものとどまらせてしまうか、それともそれを機能的なものに進めることができるかという-現にわれわれが直面している切実な情勢において-重要なキー・ポイントとなっているのである。しかして玄関が旧のままに玄関とよばれつづけ、その格式的・封建的な性格を維持するならば、それは当然住宅の内部の間取りにおける、例えば「座敷」といった封建的・格式的要素と結合して、われわれの住宅を依然として救いがたい封建的な泥沼にはめこんでおくのに大きな役割を果たすであろう。玄関は座敷につらなり、座敷は床の間を要求する。日本住宅における、これら一連の格式的・封建的要素の制覇は、他方において台所その他の家事まわりの機能的要素を一層惨めなものとし、家庭の女性を押し虐げ-ひいてはそこに育つ子供

達、さらにはともに生活する男性を引きずりおろし-われわれの人間性の幸福な発展を妨げずにはおかないであろう。

資料2：参考文献 [76] (p.31) より。

浜口ミホの『日本住宅の封建性』

終戦によって封建主義から民主主義へと社会体制が変わると、住まいづくりも従来の格式主義的な考えを捨てて、欧米にならった機能主義的な考え方に改めるべきだとの提言が行われるようになりました。こうした戦後の住宅改善運動の中で、日本住宅の格式主義について独自の主張を展開した浜口ミホの『日本住宅の封建性』（一九四九）は、古い慣習と新しい考え方のはざ間に立って一つの興味深い方向性を示しました。

ここで論じられた課題は、当時の建築家たちの関心のみにとどまるものではなく、建て売りからマンションまで、現在もお日本人の住まいと住意識を理解する上で重要なテーマとして残されているといっ

●床の間追放論

浜口はまず、「床の間が上段という格式的なものを吸収して成立したという歴史的事情に、その遠い源がある」として床の間の封建主義的性格を指摘しました。さらに、「床の間は、その部屋が客間であること、しかもそれがその家の人々よりも一段格の高い人のための客間であるということを示す」ための装置であり、「その部屋が心理的には決してその家族のためのものではない」と考えました。しかし、実際には「芸術鑑賞のためという機能的性格を含んでいる」から、明治以降の近代化の中でも簡単にはなくならず、「その陰にかくれて格式的性格もまた温存されてしまった」という。つまり、「絵や花を家族が自分等のものとして」楽しんだり、「子供たちの情操の陶冶のために役立てられるのではなくて、格式的なもののために捧げられて」いるにすぎないから、そのようなものは追放しようというのです。

一般には、床の間を日本の家から駆逐すべしという一節ばかりが注目されて、かなり反論もされたのですが、実は、この論旨は、家族の日常の居場所である「茶の間」が、あまりにみずぼらしいことと対照的であるという理由から出発した正当な「追放論」でした。

■玄関という名前をやめよう

浜口はまた、玄関についても、その呼称をやめて「出入口」にしよう提案しています。

「玄関には人間の出入という機能的な要素のはかに、封建社会的な身分関係を示そうとする格式的な要素が含まれてきたのである。そしてこの格式的要素、封建的な性格こそ、玄関にとって特徴的なのである」。

「人々が玄関という名前を口にするとき、そこには人間の出入という機能的な意味のはかに、家の社会的身分を示すという格式的な意味を含んだ、いわば社会的通念としての玄関が考えられている」。

そして、これについても「日本住宅における、これら一連の格式的・封建的要素の制覇は、他方において台所そのほかの家事まわりの機能的要素を一層みじめなものとするから好ましくないのだというのです。確かに、浜口自身が再版時のあとがきの中で「五年たった現在、玄関という……名前はやめられるどころか、牢固として存在しており、……私自身も、設計図面の中に使わざるをえない状況です」と述べている

とおり、世の中の動きの複雑さに比べ、主張が「余りに一本調子で、単純に割り切りすぎている」きらいはあります。しかし、建築家が自らの意識改革を求めて行ったこれらの主張は、家づくりの視点をどこに置くか、良い家の判断基準をどこに置くかを私たちに問いかけていて、今なお新鮮です。

資料3

日本経済新聞

2015年7月25日付

35面より

ヒロインは強し

木内昇

仕事には大抵「回」がついて回る。それは例えは予算だったり、納期や売り上げだったりする。中には万事取っ払くという仕事もあるが、なには必ずい結算が出るかと言えそうとも感はない。プロとは、工夫と発想と経験値で、枠内に収めながら解の存在を感じさせない優れた仕事をすする人を指すと思ふ。

浜口ミホは、女性初の一級建築士である。東京女子高等師範学校を卒業後、東京帝国大学の聴講生として建築を学び、前川國男に師事して現場経験を積んだ。彼女が独立して活躍するのは、住環境が大きく変わった戦後である。

かつて日本の住居は武家屋敷に見られる様式美が軸にあった。南側に客間、北側に主人の書院や家族の座敷がある。座敷は居間兼食堂兼寝室という「食寝融白」の書らし。この住居の封建性に囚われない、合理的な住空間をミホは提唱していくのだ。

ひとつには、個室を確立すること。食寝を分けることで快適な睡眠を担保でき、家事もしやすくなる。また、家族の居間を明るい南側にし、台所を食堂のすぐ隣に配した。「食堂は一家のまどいの中



イラストレーション・山口 はるみ

新たなキッチン確立 1915年、中
國大連生まれ。37年に現在のお茶の水女子大
学の前身、東京女子高等師範学校を卒業。聴
講生として、東京帝国大学工学部建築学科に
て専門知識を学ぶ。その後は建築家・前川國
男の事務所に入所。女性ではじめて一級建築
士の資格を得て、独立。家事雑用をこなす軸
に置き、新たなキッチン・モデルを確立する。
著書に「日本住宅の封建性」他、建設編集
の「明日の住宅と都市」に寄稿。

家族に寄り添う、住空間を創造

浜口ミホ

心地です。そして台所はすま
いの運営の機軸室のようなも
のです。この二つをどうやっ
てうまく結びつけてゆけば、
ということは住宅設計の動機
ころです」（「住まいすま
いと暮しの全集」）

それまで薄暗い北側の土間
に追いやられていた台所から
廊下を伝って食事を運ぶ手間
を省き、子供達が常に母親の
そばにいられるようにした。
配膳台を食卓にする工夫や、
台所と食堂の境のヘッチをカ
ウンターとして使用するな
ど、家事動線もスムーズにし
た。彼女の設計した台所はの
ちに公園をはじめ広く取り入
れられていく。

戦後、さまざま価値観が
入り乱れ、生活様式も多様化
なる中で、過去の概念に縛ら
れず、個々が「どう住もうか」
を考える時代が来たのだ。

「この雑多さの中からお
ものを拾い、あるものを捨て
て住まい方の新しい型をつく
り出そうと努力する以外には
、暮らしに対する私たちの態
度はないと思っています」

銘々の家族の暮らし方にま
ず寄り添い、その上で建築家
ならではの豊かなアイデア
を提案して、快適な住空間を
形にする――。浜口ミホは一
貫して、そういう地に足つい
た仕事を続けた。

単に斬新なもの、目を引く
もの、予算度外視なものなら
ば、誰にでもできる。なにに
せよデザイン性は重要だが、
建築物は誰がなんのために使
うかが要である。そこをな
おりにして、ただ建築家の
顕示欲のために作られたよ
うな建物は、何年経っても景
色に馴染まず、見てゐるこ
ちまで気恥ずかしくなる代物
に終わるよう思ふ。

反して浜口ミホは、時代や
人々をよく観察し、住まいの
在り方を考え抜いた。古い時
代の概念を取っ払く、でも限
定の枠内でこれだけ斬新かつ
普遍的なことをやってのけ
た。だからこそ彼女が生んだ
「新しさ」は、時を経てスタ
ンダートになり得たのだ。

◇
次回は8月15日掲載予定

資料4 日本経済新聞 2017年11月14日付36面より

住まいが変わる

家族と間取り

かつて「女の城」ともいわれた台所は、時代の変化とともに家族皆が開かれた空間に変わりつつある。背景にあるのが共働き家庭の増加と、ライフスタイルの多様化だ。炊事場から、料理をしながらコミュニケーションを図る場に変わりつつあるキッチンと、そこに集う家族の姿を追う。

多忙な家族を

つなぐキッチン

リビングとダイニングが見渡せるキッチンに立ち、コーヒーをいれるのは都内の会社員、臼井省吾さん(33)。2016年8月に中古マンションをリノベーションした今の家に引っ越した。「夫がキッチンに立つことが増えた。エプロンも買って、やる気になったみたい」と共働きの妻、理恵さん(30)は話す。

作業場が広々

以前の賃貸マンションの台所は、ダイニングに背を向け料理する壁付きタイプ。「狭くて夫婦で立つ感じではなかった」(理恵さん)。今はオープンで出入りしやすく、作業場所も広々。「暮らしへの意識が高まり、料理も楽しくなった」(省吾さん)。



キッチンに並んで作業する臼井さん夫妻。背後には作り付けの作業台もありスペースも広々



しよがのすけを教える村雨さん。1歳の次女をおんぶして発言の台所に立つ

対面型増える 夫や子供と調理

「料理は女性」の意識変化

共働き家庭増え 男子も厨房入り

シンクやコンロが一体となった「システムキッチン」が、日本で初めてクリナップから発売されたのは1973年。キッチンは一変した。共働き家庭が増えた90年代半ばからは対面型の人気が上がってきた」と同社おしい暮らし研究所の手塚佐恵子所長。キッチンの機能強化が進む一方で、なかなか変わらなかったのが「料理は女性」との意識だ。

理恵は女性の仕事」という意識だ。「性別役割分業意識の根深さが影響している」とお茶の水女子大学の石井クニ子教授。男性が料理をしたがらないことに加え、「台所仕事をひとりでこなすことが自分の役割だと考え、女性が男性を台所に入れよう」としてこなかった面もあった。

短時間で絆深まる

「お肉を1枚ずつ広げて、塩としょうを振ってね」。神奈川県に住むフリーランス、村雨玲子さん(40)は、長男の亮吾君(7)と一緒に台所に立つ。子どもの習い事がない月曜の夕方、親子の料理タイムだ。「自分で作るとおいしい」と亮吾君。

村雨さんが亮吾君と台所で過ごすようになったのは、都内の広告会社に勤めていた5年ほど前。通勤に片道約2時間かかり、保育園に迎えに行き帰宅すると夕方6時半。息子は夜8時に寝るので、一緒にいる時間が1時間半しかなかった。夕飯を作るうち台所に立つと、亮吾君もそばにくるようになり、自然と一緒に料理するようになった。

「料理を作るのはいつも妻の自分、夫や子どもも婦が増え、作業中も家族と会話できることが重要になったのでは」とみる。共働き世帯は1997年に専業主婦世帯を上回り、増加を続ける。一方、総務省の社会生活基本調査(16年)によると、日常的に家事をする夫は2割にとどまる。「料理を作るのはいつも妻の自分、夫や子どもも婦が増え、作業中も家族と会話できることが重要になったのでは」とみる。

「日々忙しく、外食も多からい、家で作る時は過程を子どもたちに見せたい」(村雨さん)。台所は親子のコミュニケーションを深め、家庭の食を伝える空間でもある。

「男性が台所に入るきっかけになれば」。働く女性が増え、カット野菜やメニュー提案型調味料などの時短食材の普及もあり、夕食の調理時間は短くなった。クリナップの調査では、夕食の調理に1時間以上かかる人は80年代前半には5割を超えていたが、13~14年は1割程度まで減った。

「お肉を1枚ずつ広げて、塩としょうを振ってね」。神奈川県に住むフリーランス、村雨玲子さん(40)は、長男の亮吾君(7)と一緒に台所に立つ。子どもの習い事がない月曜の夕方、親子の料理タイムだ。「自分で作るとおいしい」と亮吾君。

(女性面編集長 佐藤珠希)

資料5 日本経済新聞 2022年10月10日付 21面より

私の「思い込み」解き放つ

女性だから家事や育児は当たり前、男性は外で稼ぐもの……。知らずと偏った見方をしてしまうアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）。これまで男性の上司などによる女性に対する偏見がこぼれ落ちてきたが、女性自身も自らの活躍を阻む「思い込み」が潜んでいるのではない。

「もう少し子どもが大きくなれば、もっと自由にフルタイムで働きたいかな。小小学1年生と3歳、1歳の3人の子どもを持つ医師の41歳女性（東京都中央区在住）は週3日は正午から午後4時に仕事を終え、家事と育児を一人でほぼすべてこなす。

勤務医の夫の帰宅は遅く、



あなたはあてはまる？性別に対するアンコンシャス・バイアスの事例

- 「単身赴任」ときくと、男性を思い浮かべる
- 男らしく、女らしくと思うことがある
- 男性が育児を長期間とると聞くと、変わっていると思う
- 「私は主夫です」と聞くと、なんで？と、とっさと思う

（出所）アンコンシャス・バイアス研究所の守屋智敬代表理事

女性にもある性別役割に対する思い込み（出所）内閣府

家庭や社会	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	47.1%
	共働きでも男性は家庭より仕事を優先するべきだ	23.8
	共働きで子どもの具合が悪くなったとき、母親が看病するべきだ	23.2
職場	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきではない	30.7
	組織のリーダーは男性のほうが向いている	22.4
	大きな商談や大事な交渉事は男性がやる方がいい	22.4

「私の体調が悪くても休んで子どもの面倒を見てくれた」とはならない。次男が長女と別の保育園になった時は、毎日片道1時間半かけて一人で送迎を続けた。

「元官僚で長年女性政策に携わってきた昭和女子大理理事長・総長の坂東真理子氏に、日本社会と女性のアンコンシャス・バイアスについて聞いた。

「自分に対するアンコンシャス・バイアスは相手だけでなく、自分に対するものもある」と主張してきたアンコンシャス・バイアス研究所（東京・港）の守屋智敬代表理事は、「過去の経験や見聞きしたことからよって影響を受け培われたもので、自己防衛本能により生まれる」と説く。

「自らに疑問を持ち、と従来の方を変えてみよう」とする、少しでも周囲に相談してみよう、という一歩が思い込みから抜け出し新たな飛躍への突破口になる。

職場では男性の上司の考えが変わらないと前には進まない。企業のダイバーシティ&インクルージョン（多様性と包摂）を支援するカレイティスト（東京・港）の塚原月子社長は、「自らが価値観が似ている人すぐ駆けつけるなど都合がよい人を意思決定者が引き上げがちだ」と指摘する。

海外の先進的な企業では、アンコンシャス・バイアスの影響を防ぐ仕組みを取り入れられているところもある。例えば上位職が後継者を決める際、候補者の3割以上は女性にするという仕組みだ。そうすると「これまで候補にならなかった女性があがってくる。個人的なエラーをなくするための仕掛けとなる」（塚原氏）。

「元官僚で長年女性政策に携わってきた昭和女子大理理事長・総長の坂東真理子氏に、日本社会と女性のアンコンシャス・バイアスについて聞いた。」

「自分に対するアンコンシャス・バイアスは相手だけでなく、自分に対するものもある」と主張してきたアンコンシャス・バイアス研究所（東京・港）の守屋智敬代表理事は、「過去の経験や見聞きしたことからよって影響を受け培われたもので、自己防衛本能により生まれる」と説く。

「自らに疑問を持ち、と従来の方を変えてみよう」とする、少しでも周囲に相談してみよう、という一歩が思い込みから抜け出し新たな飛躍への突破口になる。

職場では男性の上司の考えが変わらないと前には進まない。企業のダイバーシティ&インクルージョン（多様性と包摂）を支援するカレイティスト（東京・港）の塚原月子社長は、「自らが価値観が似ている人すぐ駆けつけるなど都合がよい人を意思決定者が引き上げがちだ」と指摘する。

海外の先進的な企業では、アンコンシャス・バイアスの影響を防ぐ仕組みを取り入れられているところもある。例えば上位職が後継者を決める際、候補者の3割以上は女性にするという仕組みだ。そうすると「これまで候補にならなかった女性があがってくる。個人的なエラーをなくするための仕掛けとなる」（塚原氏）。

女性自身が自分で壁を乗り越える自動努力のみならず、組織や意思決定者の意識の変化も不可欠だ。（高橋里奈）

バイアスの可視化、発信がカギ

昭和女子大理理事長・総長 坂東真理子氏に聞く



「日本社会は空気が醸成されている。女性に課する概念を覆すのはとても大変。今振り返ると若い人に『十分に（社会

を「進学者や就業率をみて変わってきた」と思いう。ただ意識の変革が遅れており、変わらなければいけない。高度な専門職の女性でも夫に仕事で全力投球をせよ」と思い込んでいる。女性自身が自分で壁を乗り越える自動努力のみならず、組織や意思決定者の意識の変化も不可欠だ。（高橋里奈）

「進学者や就業率をみて変わってきた」と思いう。ただ意識の変革が遅れており、変わらなければいけない。高度な専門職の女性でも夫に仕事で全力投球をせよ」と思い込んでいる。女性自身が自分で壁を乗り越える自動努力のみならず、組織や意思決定者の意識の変化も不可欠だ。（高橋里奈）